



写真3・4 サギスゲの自生地

残念でありませんが、このようにしなければ、生育環境の変化や絶滅から守れない現状を見ると悲しくなっていますが、ある反面、安全とはいえなくても、安心できます。牧野新日本植物図鑑 (1977) のサギスゲの説明に、神戸六甲山とあるのはここイモリ谷のことと思います。また、紅谷進二編『兵庫県植物目録』(六月社書房、1971)によれば、“六甲山奥池(絶滅種)”となっています。花期は、6月上中旬で、この頃この池を訪れると、

てんてんと輝き、あたかも真白いサギが遊んでいるように見えます。他に、カキラン、モウセンゴケ、トキソウ、フトヒルムシロ、ヒツジグサ、ミズギボウシ、サワシロギク、ショウジョウバカマ、サワアザミ、アリノトウグサが自生し、湿原の妖精ハッチョウトンボが生息しています。これから、この小さな小さな池に自生する宝石のように光り輝くサギスゲが、理解ある人々によっていつまでも守られていくことを願っています。

### 野尻湖の水草 —1980年—

角野康郎

ソウギョの放流によって野尻湖の水生植物が壊滅した事情は、桜井先生の報文(27頁)に詳しいが、私は1980年7月28日に野尻湖を訪れ、水生植物の調査を行っている。この時期は、ソウギョが放流されて2年後、ようやくその除草効果が現われ始めた頃という。私は、ソウギョが放されているとはつゆも知らなかったが、どうやら壊滅直前の水生植物相を記録したことになったようだ。

その時点では、「湖底を見せぬほど」とまではゆかないが、かなりの量の水草が生育していた。優占していたのは、ヒルムシロとコカナダモである(棧橋付近)。コカナダモの侵入・繁茂が漁業に支障を与え、ソウギョ放流の原因になったのではないかと推察する。その他に、クロモ、ホザキノフサモ、セキシウモ、イトモの生育を確認した。

(20頁よりつづく)

to form particles of a mercury-sulphur compound. *J. Bryol.* 13: 101-105

———, H. Shimizu & M. Nishikawa. Elemental composition of the aquatic liverwort *Jungermannia vulcanicola* Steph. in acid streams. *Journ. Hattori Bot. Lab.* No.56: 241-248.

Shimoda, M. Macrophytic communities and their significance as indicators of water quality in two ponds in the Saijo basin, Hiroshima Prefecture, Japan. *Hikobia* 9: 1-14.

Yabe, K. & M. Numata. Ecological studies of the Mobarra-Yatsumi Marsh. Main physical and chemical factors controlling the marsh ecosystem. *Jap. J. Ecol.* 34: 173-186.

Yamasaki, S. Role of plant aeration in zonation of *Zizania latifolia* and *Pnragmites australis*. *Aquat. Bot.* 18: 287-297.

(次号につづく)